

清潔でとても明るい場所を

・【】内は笠井康平(いぬのせなか座)によるテキストで、舞台美術として書かれたもの。上演の際には舞台上に配置される。

・太字は山田亮太(TOLTA)のワークショップを経てカゲヤマ气象台が執筆した詩。

人物

サヘラントロプス・チャデンシス(S.t.)

ジンジャントロプス・ボイセイ(Z.b.)

ピテカントロプス・エレクトス(P.e.)

本文

【これは日本語が僕で書いた景色です。】

舞台上には便器がひとつある。
開演前の劇場に波の音が聞こえている。

1

【いかれた便器は嘘をつかない。】

S.t. 今年で10歳になる僕が10歳のとき、そうあれは10年前。10歳だったとき、今年で10歳になる僕が10歳だった、10年前。確かにあれは10年前だった。天気がよくて、地球は平面だと、改めて考えるのにつけていった。合衆国大統領は、ドナルド・トランプといった。トランプ！僕は漫画の主人公にしか思えない。漫画は好きでよく読んでいた。苦しい過去を思い出すとき、あたりはいちめん漫画じみて、なだらかに流れてゆく枠線の、モノトーンの意識、この薄さに折り込まれたものを、僕は親しみを感じていた。すべてとなりにいる、すべてが……ドナルド・トランプも、ドナルド・グローヴァー・ジュニアも、てりやきマックポテトも、全部漫画だ……ところで、刃牙ってジョジョよりも強いのか？

S.t. まあいいさ。とにかくあれは10年前だ。いや、10年前かな。僕は便器に、こうやって便器の横で、考えているときが一番生きているのかもしれない。僕の脳がたぐり寄せる何か。あらゆるものがその途中にある。これが苦しいってことはさっき言ったとおりだ。僕にできるのはリラックスすること。意識をさまよわせずに、ただ認識し、そしてあきらめること。すべてとなりにいる、恐怖も、苦痛も、しかしそれはどれも、あなたの名前を知らず、こちらから問いかけるほどの、価値ももたない。今が昼でも、夜でも、どちらでもいい。訪れること、やってくるものがあるだろう。あなたはそれを無視してはならない。

Z.b. (登場)窓の外には光る星空／君は見えない魔法を投げた／僕の見えない所で投げた／そんな気がしたよ※

S.t.・Z.b. (ひとしきり踊る)

Z.b. 昨日まで刑務所にいたんだけど、お腹が空いたから松屋に行ってきたんだ。

S.t. 今日の日付は。

Z.b. 5月。

S.t. 何年の。

Z.b. 20xx(に・まる・ばつ・ばつ)。

S.t. 合衆国大統領は、ドナルド・トランプ。そうだな。

Z.b. 僕の頭の中でいつも流れている音楽があるんだよね。それを聞きながらトランプの顔を見ていると、なんだか世界は正しく間違っているなという気分になるんだ。自分の尿をカップに取る時、温かいだろ。そういった感じ。僕はそのCDを旅先のブックオフで買ったんだ。2009年、いや、2012年だったかな。友達は運転していて、僕は酔っ払っていた。カクパーを6本飲んだからね。国道でざるそばを食べて、隣にあったブックオフで買ったんだ。いいブックオフだったよ。事件屋家業も買ったし、トイレも貸してくれたし、それから帰るまでの間、車でずっと聴いていたんだよね、この音楽を。(S.E.N.S.の「人と時と風の中へ」が流れる)

S.t. 刑務所はどうだった。

Z.b. いつかどこかで見たことのある風景に囲まれていて、何も決定されない、どんな答えにもたどりつかない、興味を持つことを禁止された街みたいだったな。

S.t. わかる。

Z.b. 街だけ残って国が崩壊したみたいな、気持ち悪さがずっとあった。僕には仕事がなかったし、体はなまっていた。昼であっても夜であっても、頭は妙に冴えていて、でもそれが僕にはつらかったんだな。

S.t. そうだね。

Z.b. 眠たくなってきた。

S.t. 僕はそういうものがいつも怖い。脅かされているんだよ。

Z.b. 体がすごくだるい。

S.t. 便器ならそこだよ。

Z.b. うん。

S.t. (Z.b.の動きに合わせて)「どっこいしょ、ああ、肩が凝っているな。昨日はそういえば、あまり寝ていない。実家の猫の夢ばかり見て。僕はただ、会話がしたいと、願っていた。」

Z.b. やめなよ。

S.t. でもその願いが大事なのさ。だから君は新しい方角からやってきた。僕の仮説がどうやら正しいらしいということが、ついにわかった。それはこういう仮説なんだけど、方向という概念を考えたとき、それはすべて個人から出発している。例えば右と言ったとき、それはある個人にとって右だと言うに過ぎない。今の僕にとっての右は、君にとっては左だからだ。だけどどこかの誰かと、複数としての関係を願いながら、その自己と他者の区別できない領域に、まったく新しい方向が開けるはずなんだ。その新しい方角は、個人は捉えることができず、物理的な常識を超えて、僕たちを素晴らしくするに違いない。素晴らしくってというのは、とにかく素晴らしくってことさ。僕はそのアナザー・ディレクションの仮説が、どうやら本当らしいということ、今日ついに知ることができたんだよ。ありがとう。松屋は、おいしかったかい。

Z.b. 戻るつもりはないんだよ。

S.t. この街にいながら、新しい場所に到達するんだ。そこは誰も見たことのあるはずなのに、気づかなかった、輝かしい、世界……(去る)

P.e. (三輪車で登場)

Z.b. 僕にとってブックオフのトイレが最高だった。そこは暖かかった。磨りガラスの窓があって、国道の信号が点滅していた。ふとそこで目覚める夢を見ることがある。僕は毎朝一杯のリステリンと共に、誰かと会話をしたかったんだろうか。果たしてそんなことを願ったことがあったかな。確かにあの、ゼロ年代の初頭には、そういう思い出もあったような気がする。ずいぶん忘れてしまった。マイケミが好きだったなんて、今は恥ずかしくてとても言えやしない。いつからかオバケだったみたいな実感っていうのはすごくあるな。ふとこういう風に、最高のトイレの中に収まってしまうと、あらゆるものが余計だと感じられるのだった。

S.t. (登場)窓の外には光る星空／君は見えない魔法を投げた／僕の見えない所で投げた／そんな気がしたよ※

S.t. 今なら地球が平面だと信じられる。明日さ、10時にコメダコーヒー佐鳴台店に集合しようよ。(一同去る)

2

【この街には108人の10歳が暮らしている。
県営住宅を抜けると、よごれのあつまり
やすい湖が見えてくる。駐輪場から消えた
路上ピアノの救難捜索へ飛び立つなら、
濃厚なフレッシュと砂糖の
両方を入れるのがオススメ。】

S.t. 三人なんですけど。……「只今満席ですので、お名前を書いて少々お待ちください」……。名前……。(書きながら)サヘラントロプス・チャデンシス。……(待つ)……「三名でお待ちの、さへら

ん、とろぷす、ちゃ、ちゃでんしす様。こちらへどうぞ」……(席について)……ここはパンがおいしいんだよ。

P.e. わたしパン駄目なんだよね。

Z.b. 昨日のだるさがまだ残っていてさ、全然とれないんだ。お風呂入ったんだけどね。でも、週刊新潮は買って見たよ。何か役に立つかなと思って。

P.e. 見せて。(読む)「本当の気持ち全部吐き出せるほど強くはない／でも不思議なくらいに絶望は見えない」いいこと言うなあ、さすが、週刊新潮は。

S.t. すみませんパン3つください。(3人でコーヒーを飲む)

S.t. やっぱブラックだときついな。まだ10歳だからね。

Z.b. 怪しがられないかな、我々。ちょっと挙動不審じゃないかな。

S.t. 気にするもんじゃないよ。

Z.b. でもさ。

S.t. 気にするんじゃないよ。コーヒーがまずくなる。

P.e. ちょっとトイレ。

Z.b. トイレ？ ここはトイレじゃないよ。

P.e. ここはトイレじゃないよ。(トイレに行く)何か忘れていた、何か忘れていたような感じがする……。時々イメージをするのですが、この場所は本当はどういう形をしているのでしょうか。つまり、この場所は閉じていて、この四角い様子が、もう全部である。それか、ここはこの街のはずれにあって、あの迷いやすい駅前と関係しているから、そこまでぐにやっと伸びているのだ。もっと拡大すれば、比較的温暖なこの地方の、たまにしか雪の降らない地理は、国にとっては臍臓のあたりなのかもしれない。この想像は、根拠もなく見たこともない宇宙というものへと、広がらざるを得ない。私たちはこの場所にいるのだが、それは火星や木星の配置、天の川の奥の奥から意味されている。そうやって距離を問題にしない態度は、とても楽だ。高級なソファに座っているように楽な姿勢だ。楽な姿勢というのは、死体に似ている。私はそんなもの見たことはないけれど、一度埋葬されて掘り返された、半端に腐った死体は、とてもリラックスしているように見えるだろう。こんな風に(便器に座ってリラックスする)。そして私は夢を見ました。

3

【気象庁は1時間に80mm以上の降水現象を「猛烈な雨」だという。ばらつきのない、気まぐれな私生活が、よく行き届いた圏内にいる。ずっと昔からそうだった

可能性が高い(中程度の確信度)。】

S.t. どうしたのさ。

P.e. 雨が降り出したので。

Z.b. 洗濯物入れなきゃ。(去る)

S.t. 座りなよ。(P.e.、座る)そんなに頑張らなくていいんだよ。別に、いつまで住んでいたって構わないんだから。家賃の心配だってなくていいし、自分の食べ物さえ都合してくれれば、こっちは何も言うことないんだから。

P.e. でもあまり長いとよくないから。

S.t. 気にしなくていいよ。

P.e. 気持ちはすごくありがたいな、気持ちは。

S.t. こっちだって何も無理は言わないけど、体は気をつけてね。

P.e. 体かあ。(ストレッチを始める)

Z.b. (登場)ちょっと雨すごいよ。テンション上がってきちゃう。昔の映画のモノマネしていい？

S.t. はい。

Z.b. 「一汗かいてくる。」(外に飛び出す)

S.t. なるほど。ミゾグチだね。さて、わたくしは、読書でもしようか……ふむ……。やはりニーチェは俺には軟弱すぎる……。

P.e. 私は先祖はずっと農民なんだけど、つまり歴史が変わったとしても影響はそんなにないで、私という存在のゆらぎは、さほどでもないなと思うし、その考え方に慣れているので、私はどうせこの場所で生きているので、湿気が高くても、平気になってしまったな。

S.t. 上がっているね、湿度。

P.e. 平気です。

S.t. うちの庭なんだけどさ。

P.e. えっ。

S.t. 手入れも何もしてないからいいんだけどね。雑草だって抜かなきゃいけなかったし。でもあんなところを掘ってどうしようっていうの。

P.e. どうしようっていうの。

S.t. どうしようっていうの。

P.e. どうしようっていうの、自分！

Z.b. (登場)雨やばいよ。逃げた方がいいよ。

S.t. どこへ。

Z.b. ここ開くんだよ(床を開ける)。

S.t. 開くんだ。

P.e. そうして私たちは、地下へ。

4

【匿名化された経験には、
仮名化された経験には、
その原則は適用されない。
その被写体が識別されず、
もはや識別できもしないような仕方、
どの誰でもなくなっていれば。】

S.t. 地下世界というものは、どこでも同じというわけではなくて、それぞれに固有な世界がある。ここは気楽な場所だ。闇がやわらかいというのか、水質のように個性がある。近所にわけてやりたいような闇だ。ファーマーズマーケットに売ってそうな、生産者の顔の見える、私の自信を持ってお届けできる闇です……。

P.e. 闇はどこから入ってくるの。

Z.b. このあたり、何か変だ。薄い。薄いというのは、厚さが。薄いんだ。すごく、薄いついていう感じがする。薄いついていう感じだけがある。変な場所だ。

P.e. (その場所から本を取り出す)本だ。ちょうど3冊ある。

S.t. これは、同じ本なのかな。

Z.b. でも古さが全然違うし、本というより、日記だ。これは、ぜんぜん違う場所の、ぜんぜん違う年代に書かれた、お互い全く関係のない3冊の日記だ。

3人 いつも一番身近な過去で喋る
少し高低差のある場所から
自分よりそこの方が低い

身軽な服装で走りやすい靴で同じタイミングで
意味のあることしか話さない
その風景を全て記録する
気温が下がるまで待っている
疲れるのは悪いことです

5

【トイレトペーパーホルダー、
ウォシュレットリモコン、
タオルハンガー。

さらりとした、半過去。】

P.e. (トイレで目を覚まして)地上に戻ると、雨はあがっていて、午後だった。雨はあまりにすごかったので、私の掘っていた庭は削れて、ずっと深くなっていて、その底のほうに、半分腐った自分の死体のあるのが見えた。青空にとても似合った。自分がリラックスしているのが感じられた。そしてとてもよい目覚めを感じながら、私は便器に座った自分を発見しました。

S.t. 塩とってくれない。

P.e. (渡す)はい。

S.t. 名前は？

P.e. ピテカントロプス・エレクトス。

S.t. 長いね。

P.e. 違う歴史だったら私がここにいることもない。

S.t. (立ち去るZ.b.に)どこへ？

Z.b. うん。

P.e. 行ってしまった。

6

【床、壁、天井は、熱をさえぎり、音を吸い込む、燃えないもので作ろう。放出される熱気が、直にからだにふれないようにすること。空気は、低くから取り入れ、高くから逃がすように。窓を設け、温度計と湿度計を置きましょう。

テレビは、いつも閉ざされた網入ガラスの奥に、
ひとつだけ取りつけなさい。】

Z.b. きっとみんなはまだコーヒーを飲んでいるだろう。目が覚めきっていないんだ。そして僕は、サウナにやってきました。なんて孤独な箱なんだ。ここでは私の体は一切無力になってしまう。働きかけられる何ものもなく、ただ、より汗をかく部分と、よりかかない部分に組み替えられ、私は皮膚だけになる。皮膚だけの僕が待っている。何を。見つかるのを待っている。永遠が、太陽が塩に溶ける。何度も消毒されたタオルと共に。水風呂に行ってきます。(去る)

P.e. 私たちは善良な消費者であるために、疲れない方法を探す義務を負っている。楽な姿勢を探さなくては。延々と続くプロモーション映像を眺め続けることができるための、楽な姿勢を見出さなくてはならない。食べ物がないなら注文しなければ。箱に入って届くから。

S.t. こんにちは！ アマゾンから来ました！ 野生児のブランカです。

P.e. あ、アマゾンさん。

Z.b. (登場)きっとみんなはまだコーヒーを飲んでいるんだろう。目が覚めきっていないんだ。この世で僕だけが目が覚めている。あとはみんな眠っている。目が覚めているというのが、どういう感覚か、それはテレビを観ているような感覚だ。私にははっきり観るものがある。ここに。確かに。サウナで私は、テレビを観る死体だ。死体？ 僕は今死体って言ったか。何で死体なのか。目のしっかり覚めた死体。それはでもまさに今の僕だ。テレビでは、3分間のコマーシャルが始まる。

3人 (3分間かけて各々商品を消費する)

6.5

(アニメTVのCM, 30秒に1枚)

6.5.1

【この広告は、広告主様がリーチするユーザーの言語を日本語、所在地を日本に設定しているために表示されています。】

6.5.2

【積み上げられた香花石を、
放熱器で灼熱し、水を注ぎ込むと、
あたたかな水蒸気が立ち込める。】

6.5.3

【パーソナライズド広告を受け取るかどうかは
広告表示の設定で選べます。受け取らない
設定にしたときでも一般の広告は表示されます。】

6.5.4

【乾いた空気は息苦しいからと、
やわらかな霧を浴びに来るのだった。】

6.5.5

【プライバシーを保護するために、ユーザーの情報は
5,000人以上のセグメントの1人として使用されます。】

6.5.6

【体温は上がりやすく、血圧は下がりにくい。
指先はさほど熱くならない。】

3人 アニマTV！

Z.b. アニマTVのCMだったのか。これで僕も、アニマに近づいたってわけかな。はは。水風呂に行ってきます。(去る)

7

【片側3車線区間で、反対車線は2車線だった。
駐車場、路側帯、電柱、標識、横断歩道、
中央分離帯、押しボタン式信号機があった。】

S.t. コメダでお金を使い果たしてしまった。

P.e. あー

S.t. いいバイトないかな。

P.e. 10歳でしょでも。

S.t. うん。

P.e. 実家に聞いてみようか。

S.t. 実家何なの。

P.e. 印刷所なんだけど。

S.t. 印刷所ね。いいかもね。

P.e. 聞いてみようか。

S.t. えっお願いしていい？

P.e. 聞いてみるよ。

S.t. ありがとう。(Z.b.をみつける)あつ、あんなところにいた。

P.e. おーい

Z.b. ごめんごめん。

S.t. どこに行ってたの。

Z.b. ちょっと。

P.e. 探したんだよ。

Z.b. 今そっちに行くから。

S.t. 先程、コメダコーヒーで、ピテカントロプス・エレクトスがトイレに行っている間、彼は言った。実家の猫の夢ばかり見て、眠れない日々は、刑務所に入るずっと前から続いていた。だから刑務所はもしかしたら希望なのかもしれないと思った。しかし希望なんて抱くもんじゃない。僕たちの精神はまずそこからへし折られる。我らの時代の最良の精神というものがあるのだとすれば、それは希望もないまま、忍耐強く、したたかに、楽しんでいるだろう。こういったモーニングのパンの厚さと、平凡な午後の散歩と、図書館で借りた文芸誌で、明日を生きるために、誰かのことを考えたい。ここを歩いていた。松屋を出て、僕はカナリヤ諸島に向かった。ということでもよかった。ただ、歩き過ぎたら疲れる。

Z.b. 今そっちに行くから。(横断歩道を渡る)どですかでん、どですかでん……

S.t. お、ミゾグチだね。

Z.b. え？

P.e. 赤信号だよ。

Z.b. (轢かれる。死ぬ)

8

【その先はもう木が生えない。背の低い海浜植物が散りぢりに群生して、長い地下茎を張りめぐらせる。砂防柵が途切れた先から、砂浜へ寄せる冷たい波が届かないところまでは、おびただしい足跡で覆われて、貝殻と小石と木ぎれがごちゃごちゃに埋まっている。砂地のやわらかさは、海に近づくほど失われる。】

S.t. (浜にいる)死体は海に溶けるんだろうか。

P.e. 本物の死体だったらね。

S.t. (Z.b.の死体を海に沈めて)溶けないね。

Z.b. (起きて息をあえがせる)僕の見えていた風景は、まったく風がなく、いくつかの折れ曲がった電柱があった。僕は10歳で、久石譲のsummerを聞いていたんだ。ピアノの課題だったからね。それは僕がぎりぎり過去と呼べる、最後の風景だった。僕は、その瞬間に世界が生まれたのだということを、信じられる。僕が死んだ瞬間、僕はあの時間と繋がり、すべてひとつの輪として閉じる。僕は結局、この輪の外のことは知らない。だからこれが全部だ。ところでひとつ、詩を朗読してもいいかな。

S.t. はい。

Z.b. いつも一番身近な過去で喋る
少し高低差のある場所から
自分よりそこの方が低い
身軽な服装で走りやすい靴で同じタイミングで
意味のあることしか話さない
その風景を全て記録する
気温が下がるまで待っている
疲れるのは悪いことです

S.t. ちょっとよくわかんない。

Z.b. いつも一番身近な過去で喋る
少し高低差のある場所から
自分よりそこの方が低い
身軽な服装で走りやすい靴で同じタイミングで
意味のあることしか話さない
その風景を全て記録する
気温が下がるまで待っている
疲れるのは悪いことです

Z.b. 僕の名前は、ジンジャントロプス・ボイセイ。毎日サバ缶を食べている。この詩は前に泊まったビジネスホテルの、朝食の案内の余白に書いてあった。基本的にプログレしか聴きません。

S.t. どこへ行くんだい。

Z.b. ちょっとトイレ(便器に腰掛ける)。

S.t. 俺たちは最初からトイレの中にしかいなかった、そうだろ？

P.e. 最初。

S.t. 俺たちは気がついたらいつもトイレの中だ。清潔で気持ちのいいトイレの中だいつも。俺たちはだから友達を探したっていいし、コメダにだって行っていいし、新しい次元のことを信じたって

よかったんだ。俺たちの人生はきれいなトイレの中と、海で遊んでいることとの間に、全部が詰まっているな。(遊び始める)

P.e. トイレってコメダの？

P.e. 雨が降り始めました。雨が2人の体に当たるのを私は少し離れたところから見ていました。海は2人の膝くらいのところでした。私は足を少し砂に埋めていました。海は灰色なので狭く見えました。ごみがいくつかありました。2人は私からそれぞれ5メートル、お互いの間隔は3メートルほどでした。南の風がやや強くて、雨は上空1キロメートルからでした。そういえば、水平線までの距離はだいたい4キロくらいだと聞いたことがある。1時間後、私たちはそれぞれ海を離れました。(波の音。幕)

【清潔でとても明るい場所を
清潔でとても明るい場所を
清潔でとても明るい場所を】

※フィッシュマンズ「いかれたBaby」(1993年)作詞・作曲 佐藤伸治